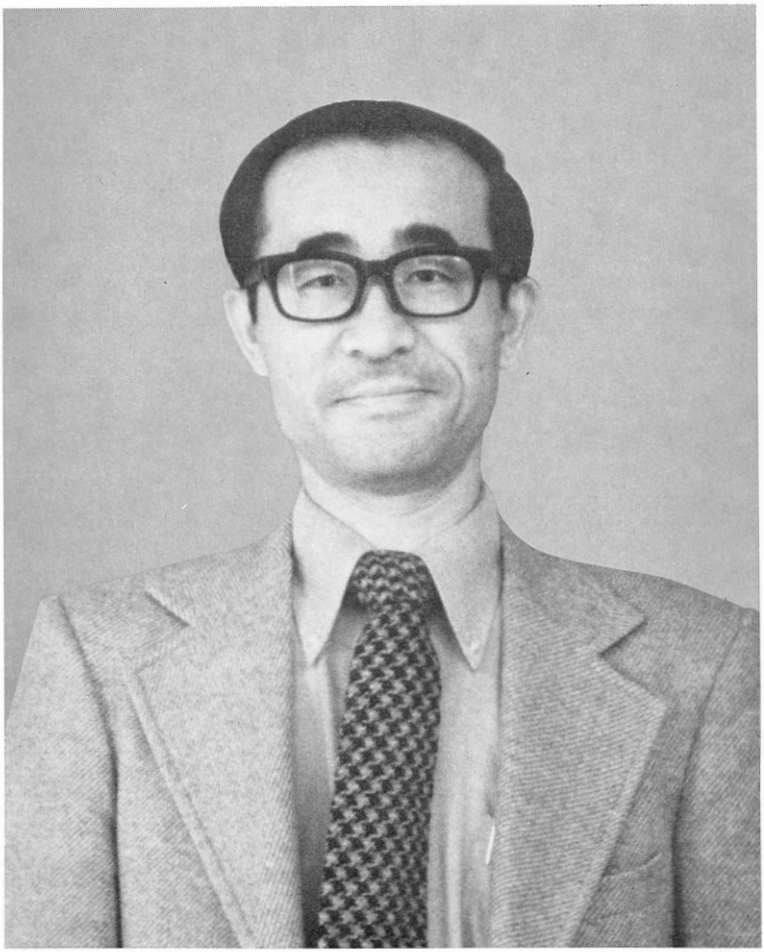
九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[81]文學研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2339160

出版情報：文學研究. 81, 1984-02-25. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



故 蛯 原 啓 教 授

蛯原啓教授追悼論文集

蛯原啓教授略歴

昭和三十二年　三月　宮崎県立宮崎大宮高等学校卒業
昭和三十二年　四月　九州大学文学部文学科（英文学専攻）入学
昭和三十五年　四月　アメリカ合衆国、オハイオ州、トレードー大学に留学（三十六年三月まで）
昭和三十七年　三月　九州大学文学部文学科卒業
昭和三十七年　四月　九州大学大学院文学研究科（英文学専攻）修士課程入学
昭和三十九年　三月　同　修了
昭和三十九年　四月　九州大学大学院文学研究科（英文学専攻）博士課程入学
昭和　四十　年　三月　同　中退
昭和　四十　年　四月　九州大学講師（教養部）
昭和　四十　年　九月　イギリス、バーミンガム大学シェイクスピア研究所に、ブリティッシュカウンシル奨学生として留学。シェイクスピアを中心にエリザベス朝劇を研究（四十一年八月まで）
昭和四十三年　四月　九州大学助教授（教養部）
昭和四十六年　四月　九州大学文学部に配置変え、英語学・英文学第二講座勤務
昭和五十二年　九月　アメリカ合衆国、ハーヴァード大学エンチン研究所においてシェイクスピアを中心にエリザベス朝劇を研究（五十三年八月まで）
昭和五十五年　四月　九州大学文学部英語学・英文学第二講座担当

同　　九州大学大学院文学研究科指導教官

昭和五十七年一月　九州大学教授（文学部）

昭和五十七年八月三日　逝去、行年四十四歳

蛯原啓教授主要業績

A Hamlet for Today	「英語英文学論叢」（九大教養部）第十七集	昭和四十二年　二月
Ambivalence in Shakespeare	「英文学研究」（日本英文学会）第四十四巻二号	昭和四十三年　三月
シェイクスピアにおける秩序の問題	「英語青年」（研究社）二十四巻九号	昭和四十三年　九月
ハムレットの苦闘―第三独白に関する覚書	「前川俊一教授還暦記念論文集」（英宝社）	昭和四十三年十二月
ジョン・ベイルの *King Johan* ―主題と構造	「英語英文学論叢」（九大教養部）第十九集	昭和四十四年　三月
The English Political Morality from *Magnyfycence* to *Wealth and Health*	「英文学研究」（日本英文学会）第四十七巻二号	昭和四十六年　三月
変化するシーザーのイメージ	「文学研究」（九大文学部）第七十輯	昭和四十八年　三月
ブルータスにおける悲劇的アイロニー	「文学研究」（九大文学部）第七十一輯	昭和四十九年　三月
シェイクスピアにおける沈黙	「英語青年」（研究社）百二十巻十一号	昭和　五十　年　二月
ヴィットリアの曖昧性	「文学研究」（九大文学部）第七十二輯	昭和　五十　年　三月
ファーディナンドの狂気―『マルフィ公爵夫人』に関する覚書	「文学研究」（九大文学部）第七十三輯	昭和五十一年　三月
Moral Vision in Webster	「文学研究」（九大文学部）第七十四輯	昭和五十二年　三月
シーザーとブルータス―性格と演技をめぐって―	「シェイクスピアの演劇的風土」（研究社）	昭和五十二年　九月

シェイクスピアの人間像　「文学の中の人間像」（九州大学出版会）　昭和五十五年 四 月

ジュリエットにおけるエロスの完成　「英語青年」（研究社）百二十六巻九号　昭和五十五年十二月

I Henry IV におけるコントラストの手法― Talbot と Joan を中心に　「文学研究」（九大文学部）第七十九輯　昭和五十七年 三 月

蛯原教授のこと

大　江　三　郎

蛯原啓教授は昭和五十七年八月三日夜、四十四歳の若さでこの世を去られた。元田教授の逝去以来空席であった英語学・英文学第二講座の教授に就任され、今後教室の運営に二人で力を合わせて当たって行こうと思っていた矢先のことであり、私にとってもまた教室全体にとってもその衝撃は非常に大きかった。

蛯原教授は学生時代から一貫してエリザベス朝詩劇、とりわけシェイクスピアの研究に集中して来られた。シェイクスピアの劇では悲劇、喜劇、史劇すべてに綿密な分析の光を当てて来られた。その興味は劇中の人物の性格や心理から劇の効果に及び、新しさを衒わない着実な研究態度によって我が国の数多いシェイクスピア研究者の注目と尊敬を集めていた。また、同教授は劇の上演技巧にも深い関心をもっており、その歴史的変遷という学問的課題に取り組むことはもちろんであったが、チャンスのある限り特に本場イギリスの劇団による上演を見て、いろいろな場所で啓蒙的な解説を発表して来られた。お元気であれば今ごろはこれまでの研究の集大成を世に問うておられたことであろう。日本の英文学界はまことに惜しい人をなくしたと思う。

蛯原教授に関連してもう一つ忘れてならないことは、同氏のすばらしい英語の運用能力であった。名門の高校を卒業したとはいえ、なんといっても地方である。高校時代に英米人の直接の指導を受けることはもとより、そのなまの発音を聞く機会すらほとんどなかったのではないかと思う。それだけに、この人の能力はやはり天性のものだったと

考えざるを得ない。大学学部在学中に同氏の抜群の英語力を認めたアメリカ人の先生が一切の保証責任をとられ、アメリカに留学させた。これは異例のことであったが、その後も、非常に困難な試験を経てシェイクスピア研究のための最高の場所である英米の大学、研究施設で研究を積まれた。昭和五十二年国連大学長が九州大学を訪問された時の講演のすばらしい通訳ぶりはまさに驚異というほかなかった。

どちらかというと口数の多い方ではなく、学生に対してもしばしば厳しい態度で研究指導に当たられたようだが、そのことがかえって学生の強い信望を集めていた。根はやさしい人で、人なつっこい笑みが印象的であった。平凡な表現しかできず心苦しいが、蛯原教授のような研究者としても英語教育者としてもすぐれた資質を有した人を、この若さで失ったことはただただ残念であるというほかない。